The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古墳時代の政治権力と埴輪生産
Author(s)	木村, 理
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76313
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（木村　理）	
論文題名	古墳時代の政治権力と埴輪生産

論文内容の要旨

本論文は、日本の国家形成期に位置づけられる古墳時代（３世紀半ば～７世紀）を対象として、当該期を特徴づける古墳の構成要素の中でも墳丘に据えつけられた埴輪を主に分析することにより、墳墓外表で執り行われる儀礼の管理体制や管理主体を復元し、当該期の政治権力の実態を明らかにすることを目的とする。

古墳時代は、墳墓に社会の有する労働力や技術が凝縮され、墳墓に設けられた諸施設の形態や規模、さらにはそこで執行される儀礼の内容などの差異をもって、墳墓祭祀を行う有力者相互の政治的な関係性が示された。そのため、我が国ではこれまで墳墓に着目し、その規模・形態・埋葬施設・副葬品などの分析を通じて国家形成期に位置づけられる当時代の政治権力を読み解くという独自の研究手法が編み出され、多くの成果を生んできた。

しかし、畿内の巨大古墳をはじめとして、詳細な発掘調査が行われていない場合がほとんどであり、しかも盗掘などもあって、埋葬施設や副葬品が不明なことも多い。それに対して、本論で対象とする埴輪はかなりの古墳で出土が確認されており、墳丘の規模や形態との相互連関を追う上で非常に有効な遺物に相当する。さらに、埴輪は奢侈的な副葬品と異なり、製品の二次的な移動や伝世は少ないとみられ、埴輪の供給関係や埴輪相互の技術や形態の類似性などをもとに、より直接的に墳墓被葬者あるいは造営者同士の関係性や墳墓儀礼などを追究できる。

上記の点を踏まえた本論の具体的な方針は、①古墳時代のうちでも古墳造営が質・量とも最も充実した中期（４世紀後葉～５世紀）にまずは焦点をあてて、王権の中枢勢力の奥津城とみなされる畿内大型古墳群（百舌鳥、古市、佐紀、馬見の各古墳群）に古墳を築いた有力者相互の政治的関係性について、埴輪の分析から詳らかにすること、②古墳時代中期を軸としつつも、前期から後期までの通時的な埴輪の分析を加えて、埴輪を用いた墳墓外表儀礼の管理体制をマクロな視点から明らかにすること、③墳墓外表儀礼の管理体制と政治権力の関係性を復元するという切り口により、より広い視野で古墳時代の権力生成戦略とその主導勢力を鮮明にし、我が国の国家形成プロセスを考察にすること、の３点である。本論において、①は第１～第７章、②は第８章、③は第９章で主に検討する。

第１章では、本論を学史上に位置づけるために、戦前から現在にいたるまでの埴輪研究に関して、主に編年研究と生産体制研究という２点から詳述した。結論的には、畿内における大型古墳群を個別に分析対象とした詳細な埴輪生産の検討が不十分であること、王権中枢の古墳群の分析に基づいて埴輪生産とそれに関与した権力関係の推移を跡づける視点がいまだ十分でなかったことを述べ、本論において克服すべき課題とした。

第２章では、古墳時代中期の埴輪編年を新たに構築し、研究を進めるにあたっての時間軸を整備した。その際には、これまでは十分に視野に収められていなかった、技術系統やサイズに差異がある埴輪をも網羅する形にした。さらに、その編年に基づいて畿内大型古墳群の形成プロセスや併行関係を復元し、とりわけ研究が不十分であった中小規模古墳を含めた検討を試みた。そして、墳丘規模の優劣と墳丘形態の差異が明瞭に相関する中期前葉～中葉（４世紀末～５世紀前半）、その関係性が崩れる中期後葉～末（５世紀後半）といった大きく２つの段階があることを指摘した。

続く第３章では、埴輪生産の復元にあたって着眼すべき属性を示すために、ハケメ同定を含む同工品分析などミクロな分析を実施して、埴輪の諸属性の発現要因を明らかにした。加えて、工人個人―複数工人からなる小グループ―小グループを束ねた工人組織といった重層的な集団編成がなされていること、また普通円筒埴輪と朝顔形埴輪・形象埴輪の間で基本的に分業体制がとられることを実証し、埴輪工人集団の実像をより詳細に捉えた。

以上の基礎的検討を踏まえた上で、第４章～第６章では古市古墳群、百舌鳥古墳群、佐紀古墳群、馬見古墳群それぞれの埴輪について、改めて製作技法、形態、使用工具などから分析し、これまで一括して扱われることの多かった各古墳群の個性ある埴輪生産方式の推移を浮き彫りにした。筆者の主張は主に以下の２点である。

１つ目は、マクロに見たとき、中期前葉～中葉には大型前方後円墳の築造に伴い拠点的生産が成立し、その生産体制下で周辺の中小規模古墳への埴輪供給もなされる一方、中期後葉～末になると各古墳群とも古墳ごとの個別的な生産が志向されていく点を明らかにしたことである。既往の研究では、中期を通じて大型前方後円墳と中小規模古墳の

埴輪生産は一体的に行われると理解されてきたが、本論での検討の結果、埴輪生産の集約度合いは時期によって異なることが判明した。このことから、埴輪生産が大型前方後円墳の下に集約化される中期前葉～中葉は、生産が特定古墳の造営主体の下で強く管理されるという点で埴輪と政治権力の結びつきが強く、生産が個別化する中期後葉～末はそうした管理体制が弛緩するという点で埴輪と政治権力の結びつきが弱くなる時期として理解した。

２つ目の主張は、畿内大型古墳群それぞれでもミクロに見れば埴輪生産の推移の仕方が異なるということである。従来の研究ではそれぞれの古墳群が軌を一にして大型前方後円墳を中心とした埴輪生産を整備したとみられていたが、そういった図式に対して①中期前葉の時点では拠点的な生産体制を整えるのは古市古墳群と佐紀古墳群に限られること、②一方で中期中葉になると、百舌鳥古墳群と馬見古墳群で大型前方後円墳を中心とした埴輪生産が整備され、かつ生産も大規模化すること、③中期後葉～末には各古墳群とも個別的な生産の兆しが強まっていき、とりわけ古市古墳群ではそれがいち早く見られることを指摘した。また、埴輪の技術は、中期前葉では古市古墳群や佐紀古墳群から百舌鳥古墳群、馬見古墳群へと供与されていく傾向が強いことを見出した。

さらに、古墳群ごとに埴輪生産の整備過程に跛行性が認められる背景として、同じ王権中枢の古墳群とはいえ、有力者相互の結びつきの強さや埴輪祭祀の管理体制、波及力が各古墳群で異なっていた事態を想定した。そして、この想定を踏まえた上で、中期前葉においては畿内大型古墳群の中でも特に古市古墳群と佐紀古墳群がそれぞれ勢力内部での結びつきを強化しつつ、埴輪生産の強い管理体制を整備する推進力を有していたこと、中期中葉においては、そういった役割が百舌鳥古墳群へ引き継がれた可能性を読み取った。

第７章では、畿内大型古墳群の動態と比較するために、播磨地域の玉丘古墳群や北近畿地域など周辺地域の首長墳を含む古墳群（地域）と、長原古墳群や紅茸山古墳群といった初期群集墳の埴輪生産分析を実施した。その結果、地域差や首長墳の有無を問わず、中期前葉～中葉においては畿内大型古墳群、とりわけ大型前方後円墳の埴輪づくりの影響が周辺地域にも強く及ぶ一方で、中期後葉～末は地域独自の生産が開始されるという対置構造が存在する点、および中期前葉では古市古墳群や佐紀古墳群、中期中葉～後葉では百舌鳥古墳群といったように、拠点的な生産体制を整備した古墳群の埴輪づくりが波及力をもつ点を地域側の分析からも跡づけることができた。

第８章では、古墳時代前期から後期まで通時的に取り上げ、生産体制のみならず、供給された円筒埴輪のサイズ、形象埴輪の組成、埴輪の配置方法など多角的な分析を実施した。そして、中期前葉～中葉および後期前葉には埴輪をめぐる秩序が政治権力によって強く規定される一方、前期前葉～中葉、中期後葉～末、後期中葉以降はそういったあり方が低調であるなど、埴輪と政治権力の結びつきは強弱を持ちつつ展開することを明らかにし、６段階からなる埴輪生産モデルを新たに提示した。また、埴輪秩序が強化される中期前葉～中葉および後期前葉は、有力者相互の政治的関係性を示すのに埴輪祭祀が大きく活用された時期であったと理解できるとともに、第４章～第７章の成果を踏まえつつ、それを企図したのは、中期前葉であれば拠点的生産および埴輪様式の整備、地域への波及力の高さからみて古市古墳群と佐紀古墳群であった可能性を指摘した。

第９章では、墳墓外表で執り行われる埴輪祭祀が権力誇示・伸張の手段とされた古墳時代の歴史的位相を、T.Earleらが提唱する権力資源論を援用しながら考察した。そして、王権の相対的な不安定な時期に、埴輪祭祀をはじめ墳墓外表面を用いて視覚的に権力の所在を示す儀礼戦略が大きく打ち出され、一方で王権の卓越度が増す時期にはそういった手段よりもむしろ、軍事面や経済面でのコントロールを通じた権力生成戦略が志向されていくことを我が国の国家形成プロセスの特徴として描き出した。また、埴輪祭祀が断続的に有力者相互の政治的関係性を示す手段として活用されるとした第８章の成果を踏まえつつ、権力生成戦略や政治体制が、振り子のように方向性を変えつつ変転していくことも古墳時代の特質として強調した。こういった見方は、経時的に古墳時代社会が権力の伸張を推し進め、異なる権力資源を開拓していくというような、単純な発展図式ではなく、成熟国家の政治形態に類した構造や権力生成戦略が急速に志向される時期もありつつ、その歩みを緩め、場合によっては逆戻りする時期もあったという試行錯誤が重ねられた時代として古墳時代を評価するものである。

たほう、古墳群単位に分析を実施した本論の成果に、副葬品や埋葬施設の既往の研究を組み込み、王権主導勢力の再検討を行うことによって、前期後葉においては佐紀古墳群とともに旧来勢力とみなされていた大和・柳本古墳群が主導的位置を維持している点、中期前葉においては百舌鳥・古市古墳群を一体に捉えるよりも、むしろ古市古墳群と佐紀古墳群が勢力内部での結合を強め、新たな権力生成戦略、とりわけ墳墓外表での儀礼を基軸とした戦略を主導していく主体であった点などを主張した。この見解は、王権主導勢力の「交替」を認めない見解に対して、「交替」が起こる点を確認しつつも、既往の理解よりもその「交替」を緩やかに捉えなおす必要性を説くものである。さらに論文の最後には、予察的に世界の墳丘墓や弥生時代の墳丘墓との比較を実施して、墳墓外表面で執り行われる儀礼が権力の源泉として大きく活用されるという古墳時代の特質を多角的な視点からあぶり出した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　木村　理　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	福永　伸哉
	副 査	大阪大学　教授	高橋　照彦
	副 査	大阪大学　准教授	市　大樹

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：古墳時代の政治権力と埴輪生産

学位申請者　木村　理

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　福永伸哉

副査　大阪大学教授　　高橋照彦

副査　大阪大学准教授　市　大樹

【論文内容の要旨】

本論文は、日本の国家形成期に位置づけられる古墳時代（３世紀半ば～７世紀）を対象として、おもに王権中枢の古墳群に用いられた埴輪の型式学的分析を通じて、埴輪生産・供給の実態、埴輪を用いる墳丘儀礼の管理のあり方を復元し、そこに関与した当該期の政治権力の特質を明らかにするものである。論文は９章からなる本論に序章と終章を加えた構成で、分量は 400 字詰原稿用紙換算で 1198 枚、図表 187 点である。

研究の目的と用語の整理を示した序章に続いて第１章では、戦前から現在にいたる埴輪研究史の展開を詳しく整理し、本論文の射程を明らかにした。第２章では、技術系統やサイズの異なる埴輪をも網羅する形で編年を構築し、研究を進めるにあたっての時間軸を整備した。さらに、それに基づいて畿内大型古墳群の形成過程を復元し、墳丘規模と墳丘形態の優劣が明瞭に相関する古墳時代中期前葉～中葉、その関係性が崩れる中期後葉～末といった２段階があることを指摘した。第３章では、埴輪生産の局面に焦点を当て、製作技法に着目した同工品分析などミクロな分析を実施して、埴輪工人集団が重層的に編成されていること、また器種間で基本的に分業体制がとられることを実証し、工人集団の実像を詳細にとらえた。

第４章～第６章では、従来、使用埴輪という点では一括して扱われることの多かった王権中枢の古市古墳群、百舌鳥古墳群、佐紀古墳群、馬見古墳群を個別に分析し、①中期前葉～中葉にかけては巨大前方後円墳の埴輪生産を担った工人集団を中心とした拠点的生産体制が認められるのに対して、中期後葉～末においては古墳ごとに個別生産・供給される傾向が強まるという推移が見られること、②中期前葉では古市古墳群と佐紀古墳群で拠点的生産や埴輪様式の整備が進められるのに対して中期中葉になると百舌鳥古墳群で拠点的生産が顕著になるといったように、王権中枢の古墳群間で生産・供給体制の整備には時期や程度の違いが存在することを主張した。

第７章では、各地の首長墳や群集墳の事例を分析して、中期前葉～中葉においては畿内大型古墳群の埴輪づくりの影響が強く及ぶ一方、中期後葉～末は地域独自の生産が開始されるという対照的なあり方が存在したこと、中期前葉では畿内大型古墳群のなかでも古市古墳群や佐紀古墳群など、拠点的な生産体制をいち早く整備した古墳群の埴輪づくりが強い波及力を持ったことを、地域側の視点からも明らかにした。

第８章では、前期から後期までを通時的に取り上げ、埴輪の生産体制、サイズ、組成、配置方法を多角的に分析した。そして、中期前葉～中葉および後期前葉には埴輪の製作・供給に政治権力が強く関与する一方、他の時

期にはそれが低調であるなど、両者の結びつきは強弱を持って展開することを見いだし、古墳時代における埴輪と政治権力の関係の推移を６段階の変遷モデルで提示した。

第９章では、埴輪祭祀が権力表示の手段とされた古墳時代の歴史的特質を、権力と儀礼にかかわる理論研究にも触れながら考察し、①王権が不安定な時期や勢力発展途上の時期には視覚的に権力の所在を示す儀礼戦略が大きく打ち出される一方で、王権の卓越度が明確な時期にはむしろ軍事・経済的コントロールを通じた戦略が志向されること、②両戦略が王権の推移に応じて交互に展開することなどを、この時代の特質であると指摘した。

以上の考察をまとめた終章では、古墳時代においては埴輪生産と政治権力のかかわりの強弱が時期によって脈動的に変化したことを主張するとともに、その背景として、複数の有力勢力で構成されていた王権内の政治的主導権の不安定さや変動が、権力掌握戦略にも影響を与えたことを推定した。そして、古墳時代は、王権が権力資源の利用戦略において多くの試行錯誤を重ねながら成熟国家への道を模索した歴史段階にあったと評価した。

【論文審査の結果の要旨】

古墳の墳丘表面を飾った埴輪は、墳丘が壊されたり埋葬施設が盗掘を受けたりした古墳からも得られることから、膨大な研究が蓄積されて今日に至っている。一方で、出土資料の増加と研究の精緻化・細分化とはうらはらに、埴輪の実証的な分析からこの時代の歴史像に迫るような骨太な研究はごく少数にとどまっているという大きな課題も抱えている。

本論文は、こうした課題に対して真正面から取り組んだもので、古墳時代の王権を構成した有力者の墓域である畿内大型古墳群の出土埴輪をおもな対象として、型式、製作技法、生産体制の実態を明らかにし、そこから王権内の権力構造や政治戦略の推移にまで説き及んだ力作である。

詳細な研究史の整理から現下の埴輪研究の未達点や課題を的確にとらえ、必要な分析作業を周到に配置していくその研究戦略は、十分に説得的である。とりわけ、みずから組み立てた型式編年を駆使して大王墓を含む大型古墳群の形成過程を精密に復元した点や、埴輪の製作技法や形態的特徴の分析から、工人・小グループ・工人集団という三階層の工人編成からなる生産体制を見いだし、供給先古墳の同定作業を踏まえて、政治権力による埴輪の生産・供給管理の実態に迫った点などは、高度で独創性豊かな研究成果といえる。しかも、これらの成果が大型古墳群内の全古墳の出土埴輪を悉皆的に実地観察した上で導出されたものであり、かつてないレベルの実証性を備えている点も、高く評価できる。また、古墳時代中期の分析を中心に据えつつも、前期、後期における埴輪生産・供給のあり方との比較を加えて、埴輪という儀礼的要素に着目した王権の政治戦略の推移を古墳時代全期間にわたって総括的に提示した点も、本論文の構想の大きさをうかがわせる。

もちろん本論文にも問題は残されている。王権の政治戦略の受け手となる地方の埴輪の分析がなお不十分であること、王権がコントロールしたとする「埴輪祭祀」の内容が十分説明されていないこと、埴輪以外の墳墓要素、集落、生産、流通などの研究現状への目配りがさらに必要なことなどは、克服すべき課題である。

とはいえ、膨大な資料の観察に基づいて畿内大型古墳群に用いられた埴輪の生産・供給のあり方を実証的に解明するとともに、そこから王権の政治戦略の推移を読み取り、この時代の歴史像に論及した本論文は、今後の埴輪研究の指針ともなる大きな意義を有している。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。